

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02686

研究課題名（和文）在日中国人を対象としたペアレント・トレーニングプログラム開発のための実証的研究

研究課題名（英文）An Empirical Study for the Development of a Parent Training Program for Chinese Residents in Japan

研究代表者

井上 菜穂（Inoue, Naho）

鳥取大学・教育支援・国際交流推進機構・准教授

研究者番号：50748845

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：現在我が国の在留外国人は増加し続けており、その中には発達遅れや偏りなどの障害がある児を持つ家族も多くいる。しかし彼ら家族への支援は著しく遅れており、何のサポートを受けることもできず、孤立しているケースも少なくない。本研究では在留外国人の中でも一番多い在留中国人の中で発達が気にある児をもつ親を対象とした中国版PTを開発、その効果を検証した。その結果、参加者のうつ尺度や精神健康度の改善、子どもの行動改善がみられたことから、中国版PTは一定の効果があることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在留外国人の増加に対して政府は共生施策を推進してきたが、障害のある児を持つ家族への支援は遅れている。外国人コミュニティの子育て支援は各自自治体も憂慮しており、特に発達遅れがある児をもつ家族支援は虐待防止の観点からも重要課題となっている。ペアレント・トレーニング（以下、PT）はWHOや厚労省も推奨しているが、在留外国人家族へのPTは言語の問題だけでなく文化的適合性の要因から著しく遅れている。他民族国家の米国や欧州はこのような研究が進んでいるが、本邦ではほとんどなく、異国文化での子育て支援研究としての独創性だけでなく社会的意義も大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The number of foreign residents in Japan continues to increase, and many of them are families with children who have developmental delays, biases, or other disabilities. However, support for these families has lagged behind significantly, and there are many cases where they are unable to receive any support and are isolated. In this study, we developed a Chinese version of PT for parents of children with developmental concerns among Chinese residents, the largest group of foreign residents in Japan, and examined its effectiveness. The results showed that the Chinese version of PT was effective to a certain extent, as the participants' depression scale and mental health level improved and their children's behavior improved.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ペアレント・トレーニング 発達障害 在留外国人 在留中国人 子育て支援

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 発達障害のある子どもの親に対するペアレント・トレーニング(以下、PT とする)は、親への介入プログラムの1つであり、子どもとのより良いかわり方を学びながら、子どもの行動改善や発達促進を目指すことを目的としたプログラムである。行動療法理論をベースにしており、子どもの行動に焦点をあて、具体的な対応方法を学ぶことで日常の困りごとを解消していく。子どもの行動改善だけでなく、親自身の自己肯定感の改善や精神健康度の改善などの効果もみられる。1960年代に米国で始まり、近年では世界保健機構(World Health Organization: WHO)も、発達障害のある子どもへの有効な介入方法の一つとして推奨している。

(2) 我が国においても、2016年の発達障害者支援法改正において発達障害者の家族支援の重要性が示された。厚生労働省は「発達障害児及び家族等支援事業」において、発達障害児及びその家族に対する支援方法の一つにPTを挙げ、都道府県、市町村に対し、PTの実施及び支援スキル習得のための研修、実施者の養成を行うなど、PTの推進に取り組んできた。その結果、発達障害に関わる医療機関、市町村の保健センター、公立の教育相談機関、発達障害支援センターや発達障害に関わるNPO団体などの機関で広く実施されるようになった。これらのことからPTは我が国において発達障害支援の効果的な支援方法の一つとして定着してきたといえる。

(3) しかし一方で、日本に住む発達に遅れや偏りのある在留外国人の親子への支援は著しく遅れている。法務省入局管理局において登録されている在留外国人数は、現在約322万人であり(2023年6月)この20年間で約1.9倍増加している。国別では中国が一番多く約79万人、次いでベトナム、韓国と続く。Maenner, M.J., Shaw, K. A., & Baio, J. (2020)の調査では8歳の子どもの54人に1人がASDであることが報告されており、在留中国人の中の15歳以下の人口は約83000人あまりいることから、これらを考慮すると在留中国人の中にも多くのASD児をもつ家族がいることが推測できる。楊ら(2020)が教育委員会へ質問紙調査をおこなったところ、外国人児童生徒のうちの62.34%が学習面・行動面への支援が必要であることが明らかになったことから、在日外国人の発達障害およびその疑いのある児への支援方法について検討すべきであると考えられる。

(4) 発達障害児およびその疑いのある児を抱えている外国籍の親は受診までの過程や診断後のフォロー等においても困難を抱えていると推測できる。橋本ら(2011)は、日本で出産、子育てを経験した外国人女性を対象として、育児の困り事などについて半構造化面接を実施した結果、日本語による情報伝達困難への不安が一番大きく、特に保健医療分野の専門用語が大きな壁になっていることが改めて明らかになった。このことは発達に心配のある子どもの受診を遅らせたり、専門機関や学校と連携したり情報を得たりする機会が減少する恐れがある。磯野ら(2004)は母親への育児に関するアンケートを実施し、「母国語で相談できる人や情報がほしい」というニーズの強さを指摘した。さらに橋本ら(2011)は外国人が保健医療にアクセスする際、日常の言葉以外にも、専門用語やシステムの理解といったヘルスリテラシーが必要となると述べている。これらのことから、子どもの発達支援という観点から、現在の日本人むけのサービスに加えて、言語に配慮したサービスを構築していくことが早急に求められている。

2. 研究の目的

本研究では日本で開発してきたPTを改編し、文化等も考慮した「中国語版PTプログラム」を作成する。発達に問題を抱えている幼児をもつ在留中国人を対象とした中国語PTの実施およびその効果検討をおこなうことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 対象

本研究は2年目に第1グループ、3年目に第2グループのPTを実施した。第1グループは未就学児を主に対象としたグループで、2歳~4歳の中国国籍の児をもつ親6名(ASD1名、ASDまたはADHD疑いで経過観察中5名)を対象にPTを実施し、データ欠損のなかった5名を分析対象とした。第2グループは主に就学している子どもを対象としたグループで、6歳~10歳の中国国籍の児をもつ親6名、日本国籍の児をもつ親1名(母親が中国人)の計7名(いずれもASD)を対象とした。当初は9名の参加であったが、祝日で帰国した際に日本に戻らなかった2名を除いた7名を分析対象とした。

(2) 期間

第1グループはX年11月~X+1年3月までの期間、第2グループはX+1年8月~12月までの期間で実施をした。いずれも隔週での実施であったが、中国の祝日(春節や国慶節など)の時期は長期間にわたって帰国するため、それらを調整することが必要であった。

(3) 手続き

日本語のPTプログラム(井上,2013)をベースにプラットフォームや先行研究の知見をくわえ、さらには中国文化を配慮した中国語版PTプログラムの作成をおこなった(Table 1)。講座は対面4回とオンライン4回の全8回で実施した。各回の講座は講義とグループワークから構成されていた。日本人専門家がファシリテータをおこない、中国人専門家が同時通訳をおこなった。講義は日本人専門家がPPTで作成したものを講座開始前に中国人専門家によって翻訳のうえ、音声読み上げソフト「音読さん」を使用して音声データをスライドに挿入した。PTでは音声ファイルを再生したのちに、追加説明を口頭で同時通訳の形式でおこなった。グループワークは対面もオンラインの際も2グループに別れて実施、各グループに1人ずつ中国人のスタッフを配置した。

Table 1 中国PTのプログラム

	内容	グループワーク	ホームワーク	形式
#1	親のストレスマネジメント	自己紹介	家族をほめてみよう	対面
#2	上手なほめかたのコツ	子どもの好きな言葉リストの作成	さまざまな方法で家族をほめてみよう	オンライン
#3	上手なほめかたのコツ	子ども好きなものリストの作成	子どもの好きな方法でほめてみよう	オンライン
#4	行動の仕組み	ABC分析を考える	家庭で取り組みたい課題を考える	対面
#5	環境調整のポイント	環境調整の工夫	自分の取り組む課題の環境調整を考える	オンライン
#6	指示や声かけの仕方	課題での声かけの工夫	課題の手続き作成表を作成する	オンライン
#7	問題行動への対応①	課題分析	課題の実施	オンライン
#8	問題行動への対応②	自分の子どもの問題行動のABC分析	課題の実施	対面

(4) 評価

評価尺度の変化と親子の行動の変化で評価をおこなった。PT終了後には半構造化面接をおこなった。評価尺度はBDI(ベック抑うつ質問票)、GHQ12(精神健康調査)、SDQ(子どもの強さと困難さアンケート)を使用し、いずれも中国で標準化された中国語版で実施した。

4. 研究成果

(1) 参加状況

第1グループ、第2グループとも出席率は高く、すべての参加者がドロップアウトすることなく終了した。邦人のPTと比較しても参加率は高かったといえる。

(2) 評価尺度

BDI : ベック抑うつ質問票

第1グループはPT実施前に境界域1名、軽いうつ状態1名であったが、PT実施後は軽いうつ状態1名であった。改善はみられたが、事前・事後の有意差はみられなかった。第2グループはPT前には境界域1名、軽いうつ状態4名であった。PT後は軽いうつ状態4名であった。軽いうつ状態であった4名中2名は正常範囲になり、残り2名は点数の改善がみられた。しかし事前に正常範囲であり、かつ点数がとても低かった2名は点数が大幅に上昇した。

GHQ12 : 精神健康調査

第1グループはPT実施前には3名が精神不健康群、PT後は2名が精神不健康群であった。第2グループはPT実施前には2名が精神不健康群、PT後は1名が精神不健康群であった。点数の改善はみられたが、事前・事後の有意差はみられなかった。

SDQ : 子どもの強さと困難さアンケート

事後調査で点数の改善がみられたものの、有意差はみられなかった。

本PTへの参加者の中は第1グループ、第2グループともうつ傾向や境界域、精神不健康群に該当する者の参加が多くみられた。これは言語の通じにくい異国での生活に加え、子どもの発達の遅れや偏りを相談できる場がなく、親が抱え込んでいることが要因になっている可能性も考えられる。PTの中でかかりつけ医の話題が出た際にも、子どもの「かかりつけ医」がいると答えた親はほとんどおらず、継続的に発達支援のフォローを受けている児も1名のみであった。診断の際に一度受診をしたものの、継続的なフォローはおこなえていない現状が明らかになった。統計上の有意差はみられなかったものの、PTに参加をすることで、子どもの行動の改善や親の精神健康度の改善傾向がみられたことから、中国語版のPTの効果は期待できると考えられる。

(3) 子どもの行動の変化

PT プログラム中に実施した第1グループと第2グループのターゲット行動はすべての親で1課題以上、最大3課題を達成することができた。

(4) 半構造化面接

PT 開始前とPT 実施後に半構造化面接をおこなった。PT 開始前は 子どもの年齢、学校種、家族構成など 家での言語、学校での言語について 子どもの言語面、行動面についての現状 PT で一番学びたいと思っていることについて質問をおこなった。PT 実施後の質問項目は、PT に参加した満足度 PT 参加の感想 PT から得たものについてであった。第1グループ、第2グループともに参加者の満足度は高く、「同じような機会があったらまた参加したい」「継続的に勉強会を開いてほしい」といった意見が多かった。またPT に参加したことで、「周囲に相談ができる人が増えたことがよかった」「中国人は自分の悩みをあまり人に伝えないが、今回参加したことで自分の子どもの困っていることについて話せたことがよかった」という意見があった。また中国語で話げできたことを喜ぶ意見もあった。一方でPT が終わってしまうことへの不安の声も聞かれた。

(5) 日本との文化差

PT の中で「中国人は見栄を張る文化なので、人に悩みを相談したことがなかった」と話す親が多く、それも精神面で影響が出る一因になっている可能性も高いと考えられる。今回のPT を通して、子どもの発達という同じ悩みを抱えている親と知り合い、悩みを話し合う場ができたことで気持ちが軽くなったと話す参加者もあり、会の終了後もずっと親同士で話し続ける場面をししばみかけた。さらに、中国では祖母の影響力が大きいことも明らかになった。中国から日本に親をよんで一緒に生活をしている家族も多く、祖母が子どもの発達について理解をしてくれないことが母親の悩みになっていることも今回のPT の中で明らかになった。中国ではまだ祖母世代の発達障害への理解度は低く、母親のしつけの問題であると誤解されていることも少なくない。このことは精神健康度の低さへ影響があると推測できる。またPT を進めていくうえでも、これらに配慮して進めていくことが求められる。また、近年、中国もほめる文化が浸透し始めてきていること、中国語もあいまい語が多いため子どもへの指示が伝わりにくいなど、日本と共通部分も多く、日本版を中国版に改編しても十分使用できることがわかった。今回はオンラインと対面の組み合わせで実施したが、参加者からは対面を希望する声が多かった。

(6) まとめ

在留外国人の母親が日本語をあまり話せないケースは多く、そのことで子どもの発達の支援サービスを受けることができない場合も少なくない。今回は在留中国人を対象に実施したが、これは他の在留外国人にも共通している。本PT のようなグループ形式での支援やオンラインでの支援体制の充実をさらに検証していくことは、在留外国人の支援の1つとして効果的であると期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Inoue Masahiko, Inoue Naho, Nakatani Keita, Shikibu Yoko	4. 巻 66
2. 論文標題 Online Parent Training for Parents of Children with Autism Spectrum Disorders: Prototype Development of the On-Demand Type	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Yonago Acta Medica	6. 最初と最後の頁 95 ~ 103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.33160/yam.2023.02.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Ou Jieping; Sanbai Ami; Pei Hong; Uno Akira; Yoneda Hiroki	4. 巻 7
2. 論文標題 Cognitive abilities related to reading and writing skills in Chinese third-grade children	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of ICSAR	6. 最初と最後の頁 144-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Inoue Masahiko, Tatsumi Aika, Fukuzaki Toshiki	4. 巻 44
2. 論文標題 Effectiveness of the internet based parent education program on applied behavior analysis for parents of children with autism spectrum disorder	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Brain and Development	6. 最初と最後の頁 655 ~ 663
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.braindev.2022.07.008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Haraguchi Hideyuki, Inoue Masahiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Evaluating outcomes of a community-based parent training program for Japanese children with developmental disabilities: a retrospective pilot study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Developmental Disabilities	6. 最初と最後の頁 1 ~ 10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/20473869.2022.2070420	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Inoue Masahiko, Okamoto Kazuko	4. 巻 65
2. 論文標題 Japanese Parents' Experiences with Home-Based Interventions of Applied Behavior Analysis for Young Children with Autism Spectrum Disorders	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Yonago Acta Medica	6. 最初と最後の頁 266 ~ 269
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.33160/yam.2022.08.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山口穂菜美・井上雅彦	4. 巻 62
2. 論文標題 障害児通所支援におけるペアレントトレーニングの実施状況と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 117-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前垣 義弘, 中村 裕子, 大羽 沢子, 阪本 清美	4. 巻 36
2. 論文標題 鳥取県における不登校児童・生徒の背景疾患・発達特性・家庭及び学校環境要因に関する基礎研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 疾病構造の地域特性対策専門委員会報告	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Inoue Masahiko, Inoue Naho	4. 巻 -
2. 論文標題 Effects of Behavioral and Functional Training on Japanese Preschool Teacher Knowledge and Child Behavior	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Positive Behavior Interventions	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/1098300721993531	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Inoue Naho, Okanishi Tohru, Inoue Masahiko, Maegaki Yoshihiro	4. 巻 64
2. 論文標題 Psychological Preparations Affecting the Emotions of Children with Developmental Disorders Toward Hospitals	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Yonago Acta Medica	6. 最初と最後の頁 92 ~ 97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.33160/yam.2021.02.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Inoue Masahiko, Kishimoto Tomohiro, Fukuzaki Toshiki	4. 巻 64
2. 論文標題 Interventions for Students with Problem Behaviors: A Workshop Applied Behavior Analysis for Japanese Teachers	Incorporating 5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Yonago Acta Medica	6. 最初と最後の頁 98 ~ 106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.33160/yam.2021.02.013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Inoue Masahiko, Takagi Asuka	4. 巻 64
2. 論文標題 The Telehealth Program for Kindergarten and Nursery Teachers in Children with Behavioral Problems	Charge of 5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Yonago Acta Medica	6. 最初と最後の頁 143 ~ 146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.33160/yam.2021.02.016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 裴虹、区潔萍、楊鈺倩、宋鷺鷺、米田宏樹	4. 巻 46
2. 論文標題 中国における知的障害教育カリキュラム開発の現状と課題 1995 ~ 2020年の研究論文の分析を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 障害科学研究	6. 最初と最後の頁 113-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Masahiko Inoue ; Naho Inoue
2. 発表標題 Online Parent Training for Parents of Children with Autism Spectrum Disorders
3. 学会等名 17TH ANNUAL AUTISM CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 楊鈺倩・裴虹・米田 宏樹
2. 発表標題 特別なニーズのある外国人児童の困難とその要因－小学校の担任教師への質問紙調査を通して－
3. 学会等名 障害科学学会第17回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 楊鈺倩・裴虹・三盃亜美・米田宏樹
2. 発表標題 小学校における外国人児童の困難とその支援-外国人児童に関わる教員への質問紙調査を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 裴虹・李彩環・胡孜奇・任龍在
2. 発表標題 学校における外国人子どもの困難さに関する文献的検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第60回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上雅彦
2. 発表標題 「コロナ禍」における親支援-「コロナ禍」における親支援
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会発表論文集
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 裴虹・竹内 康二
2. 発表標題 特別なニーズがある外国人の子どもに対する支援連携の在り方 -多機関連携における各機関の役割を中心に-
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 裴虹・竹内 康二
2. 発表標題 特別なニーズがある外国人子どもに適応する知能検査の方法や配慮に関する実践的検討
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楊鈺倩・李彩環・裴虹・米田宏樹
2. 発表標題 保育園における外国人幼児の困難とその支援-保育士のインタビュー調査を通して-
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤原あや・裴虹
2. 発表標題 児童発達センターにおける社会的遊びの研修の試み
3. 学会等名 障害科学学会第17回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 嘉手苺瑠輝, 荻原大雅, 黒田里理, 小山義晃, 井上雅彦
2. 発表標題 オンライン・ペアレント・トレーニングの有効性に関する研究 対面式ペアレント・トレーニングとオンライン・ペアレント・トレーニングの効果の検討から
3. 学会等名 日本発達障害学会第56大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小山義晃, 山中智央, 佐辺優斗, 井上雅彦
2. 発表標題 発達障害児の親に遠隔PTを実施したスタッフに生じる学びと困難さ(2)-物理的要因に着目して-
3. 学会等名 日本発達障害学会第56回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山中智央, 佐辺優斗, 小山義晃, 井上雅彦
2. 発表標題 発達障害児の親に遠隔PTを実施したスタッフに生じる学びと困難さ(1)-遠隔PTを実施したスタッフの学びに着目して-
3. 学会等名 日本発達障害学会第56回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐辺優斗, 小山義晃, 山中智央, 井上雅彦
2. 発表標題 発達障害児の親に遠隔PTを実施したスタッフに生じる学びと困難さ(3)-心理的要因に着目して-
3. 学会等名 日本発達障害学会第56回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原口英之, 熊仁美, 井口妙子, 井上雅彦, 鈴木久也
2. 発表標題 我が国における発達障害の早期支援-そのアウトカムと社会実装-
3. 学会等名 日本行動分析学会第39回年次大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井上雅彦	4. 発行年 2021年
2. 出版社 株式会社じほう	5. 総ページ数 355
3. 書名 ペアレント・トレーニングガイドブック第2版 第10章ペアレント・トレーニングへの父親参加	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井上 雅彦 (Inoue Masahiko) (20252819)	鳥取大学・医学(系)研究科(研究院)・教授 (15101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	中村 裕子 (Nakamura Yuko) (60868496)	鳥取大学・医学部・助教 (15101)	
研究 分 担 者	裴 虹 (Pei Hong) (70633915)	筑波大学・人間系・研究員 (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関